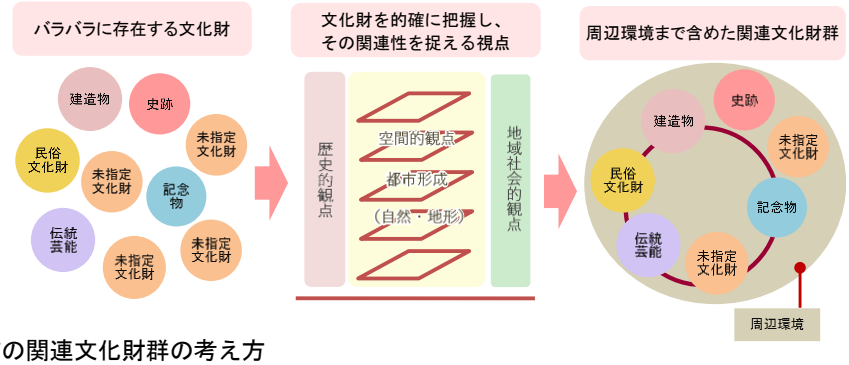
3 関連文化財群とストーリーの設定例

札幌市文化財保存活用地域計画の第 4 章で札幌市の歴史文化の特徴について、空間的観点（自然環境や地形など）・地域社会的観点（社会を大きく変えた出来事など）・歴史的観点（歴史文化の時代を超えた継承）から 6 つの特徴を整理しました。これらの歴史文化の特徴から導き出される関連文化財群の一例として概要とストーリーをまとめましたので紹介します。

※（参考）札幌市文化財保存活用地域計画 P68 より抜粋

■関連文化財群とは

文化財は、人々の暮らしの中で他の要素と密接な関係を持つことでその価値が形成され、受け継がれてきているものです。関連文化財群とは、文化財とその価値を形成する様々な要素（周辺環境）とを一体のものとして捉えたものであり、文化財の本来の価値や魅力を損なわず、様々な形で生かしながら将来に引き継ぐための枠組です。



■札幌市の関連文化財群の考え方

札幌市では、かけがえのない歴史文化の価値を市民とともに発見し、それらを札幌の魅力資源として総合的に保存・活用するための枠組として、関連文化財群の考え方を用います。

札幌市では、概ね以下の要件を備えた「文化財や周辺環境のまとまり」を、広く市民の声を取り入れて様々な切り口で選び出し、札幌らしさを表す関連文化財群を順次、設定していくこととします。

■札幌市の関連文化財群を設定する際の要件

- 札幌の歴史文化の特徴をよく表す文化財群を一つのまとまりとして捉えることで、核となる文化財以外の様々な要素（関連する文化財や周辺環境）が見い出され、結果的に、札幌の個性や魅力がより際立つようになるもの
- 大人から子どもまでが楽しめる物語（ストーリー）によって説明され、これにより、札幌の歴史文化についての魅力のＰＲや、理解の促進に貢献するもの
- 市民が愛着や誇りを感じ、自ら守り伝えていきたいと感じるとともに、その魅力を誰かに伝えたいと感じるもの

■関連文化財群の例

札幌市の歴史文化の特徴	関連文化財群（例）
原始の昔から育まれた人々の暮らし	① 札幌都心の清流に育まれた人々
幕末に始まる諸村の開拓と 開拓使による中心市街地の建設	② 豊かな水に支えられた東部産業基地
オリンピックで変わった 街の姿と市民の意識	③ 学生らが広めた札幌のスキー文化
都心で楽しむ季節の催し・風物詩	④ 札幌まつりの華・神輿渡御を支える人々
積雪寒冷地に成立した大都市	⑤ 積雪寒冷都市の歴史が残す建造物群
継承されるアイヌ文化	⑥ アイヌ語地名から考える札幌の今昔

①　札幌都心の清流に育まれた人々　～考古学の小径～

―概要―

かつて札幌の都心部を流れていた複数の河川群は、開拓期よりも遙か以前からここに暮らす人々の生活を潤し支えてきました。現在では、開発の進展とともに、そのほとんどは失われてしまいましたが、この地に暮らした人々の営みは遺跡となって残り、現代に生きる私たちはその痕跡を目にすることができます。これら都心部の旧河川跡、遺跡、自然を一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

構成要素の例：扇状地、旧河川跡、北大植物園、北海道大学、サクシュコトニ川、続縄文文化、擦文文化、遺跡　など

―ストーリー―

札幌は、北西部から南西部の山地地域、東部の丘陵・台地地域、河川につくられた扇状地、北部の沖積平野など、バラエティに富む地形から成り立っています。なかでも、札幌の都心部は、豊平川がつくった扇状地のうえにあり、扇央から扇端部にかかる平坦で水はけの良い土地が北のまちづくりの出発点に選ばれ、札幌発展の基礎となりました。

この扇状地の扇端部は、概ね標高 15～18m程に相当し、かつて豊平川の伏流水が湧き出る水源地帯となり、現在の知事公館、北大植物園、北海道庁、サッポロビール園などが湧水池となって、そこから複数の河川が北流していました。現在では、まちの発展とともに、そのほとんどが姿を消してしまいましたが、明治期までは豊富な水量を湛えた清流が流れ、札幌初期の産業を支えていたこれらの河川には、たくさんの鮭が遡上していたと言われています。今でも、知事公館や北大植物園、北海道大学構内、篠路界隈では、人工池や河川の復元、用水路として、一部にその名残を見ることができます。

しかし、実は、明治の開拓期よりも遙か以前から、これらの河川とともに暮らしてきた人々がいました。

特に、都心の水源のひとつであった北大植物園から北海道大学方面に向かい、大学構内に復元されたサクシュコトニ川を辿る旧河川ルートは、都心部にも関わらず、今でも豊かな自然が残され、その流域には数多くの続縄文・擦文文化の遺跡が見つかっています。北海道大学構内の各所には、発掘調査によって明らかになった遺跡の案内板が設置され、人類遺跡をトレースできるコースも整備されており、この界隈を散策するだけでも古代の息吹が感じられ、遙か 2000 年の時の流れに想いを馳せることができます。

また、当時の札幌がどのような時代だったのか、遺跡からどのようなものが見つかっているのかは、主に北海道大学埋蔵文化財調査センター展示室、北海道大学総合博物館のほか、札幌市埋蔵文化財センター展示室でも知ることができます。

札幌市街　豊平川
札幌市公文書館所蔵

藻岩山から望む札幌市街
札幌市公文書館所蔵

北海道大学構内の遺跡保存庭園

②　豊かな水に支えられた東部産業基地

―概要―

札幌市の創成川以東・苗穂地区周辺は、明治期から、豊平川の豊かな水資源を生かした工業・産業基地として開発され、発展してきました。産業基地として栄えた地域の歴史を今に伝える建物や遺構、この地で生まれたビールにまつわる食文化等について、一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

構成要素の例：旧開拓使工業局庁舎、札幌苗穂地区の工場・記念館群、豊平川伏流水、扇状地、ホーレス・ケプロン、岩佐ビル　など

―ストーリー―

明治初頭、現在の札幌都心部には、豊平川支流の川筋が網の目状に広がり、伏流水が地上に多くの湧水をつくっていました。開拓使は、ホーレス・ケプロンの提言を受け、利水に優れる札幌市街地東部から苗穂地区を工業地区として開発することとし、明治 5 年（1872 年）頃には器械場の建設を開始しています。現在の大通東 2 丁目に工業局事務所が置かれ、周辺は、製材、鋳造、鍛冶、木工などの製造工場が集積し、建設資材、家財、農工具、車両 など、北海道開拓に欠かせない物資の生産拠点となっていきました。

動力や用水としてだけではなく、一帯に湛えられた良質な地下水は、近代的な醸造業など産業の発展を支えました。政府は当初、東京で官製ビール事業を計画しましたが、冷涼な気候がドイツ式冷製麦酒の製造に適することなどを理由にその計画が変更され、明治 9 年（1876 年）、葡萄酒醸造所とともに、開拓使麦酒醸造所（後のサッポロビールの前身）が誕生しています。国産ビール発祥の地となった札幌は、最近では「ビールのまち・札幌」として国内外に発信され、「札幌のビール」は来札観光客の楽しみの一つにもなっています。

これら官営事業は民間に払い下げられた後も含めて、札幌に産業を根付かせる基礎となりました。一帯では明治・大正期から、良質な水を生かした民間の清酒や味噌作りが始まっています。独特の風情ある街並みには、札幌の産業のはじまりの歴史がかくれています。

サッポロファクトリー
札幌開拓使麦酒醸造所

サッポロビール博物館
サッポロビール園

札幌の日本酒「千歳鶴」

岩佐ビル
出典：札幌市 HP

③　学生らが広めた札幌のスキー文化

―概要―

冬季オリンピック札幌大会の開催を契機に、市民にウィンタースポーツ文化が浸透したと言われる札幌ですが、実際には、オリンピック開催のはるか以前より、雪を楽しむ人々の暮らしがありました。明治期に外国人講師らが持ち込み、学生らが広めていった「札幌のスキー文化」に関連する施設や場所等を一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

構成要素の例: 藻岩山、手稲山、三角山、大倉山・宮の森ジャンプ競技場、冬季オリンピック札幌大会のエピソード、 ハンス・コラー・遠藤吉三郎・三瓶勝美　など

―ストーリー―

明治 41 年（1908 年）、東北帝国大学農科大学（現在の北海道大学）のスイス人ドイツ語講師ハンス・コラーは、持参したアルパインスキーを学内に紹介し、興味を持った学生たちは、試行錯誤しながら練習に励んだと言います。「日本スキー発祥の地」とされる新潟県上越市で、後述のレルヒによる初のスキー指導が行われたのが明治 44 年（1911 年）とされることから、コラーのケースも、日本スキー史上最初期のエピソードと考えてよいでしょう。

明治 45 年（1912 年）には、旧日本軍に招かれ日本にスキー技術を伝えたオーストリア＝ハンガリー帝国の軍人テオドール・エードラー・フォン・レルヒが、旭川第 7 師団にスキー指導を実施。これに参加した月寒歩兵第二十五連隊の三瓶勝美らも、後に札幌市民にスキー指導を行いました。

学生らに受け入れられたスキーは、三角山や宅地化される以前の宮の森一帯の傾斜地、円山南斜面などのフィールドで楽しまれながら、市民に愛好者を増やしていきます。様々なスキー競技会が開催されるようになると、技術を競うスポーツとしても注目されるようになりました。ノルウェー留学から帰国後、北海道帝国大学教授となった遠藤吉三郎により、ノルディックスキー競技としてのスキージャンプが伝えられ、その後、いくつかのシャンツェ（ジャンプ台）が建設されるなど、競技環境も整備されていきました。

大規模なスキー競技会の経験も、札幌におけるスキー文化の普及を後押ししました。昭和 5 年（1930 年）に始まる宮様スキー大会国際競技会（当初「秩父宮殿下高松宮殿下御来道記念大会」）は、90 年以上に及ぶ長い歴史を通じてスキー競技の発展を支え、市民がスキーに親しむ機会を提供してきました。また、昭和 47 年（1972 年）の冬季オリンピック札幌大会において、スキージャンプ 70m 級（現在のノーマルヒル）の表彰台を、日本の笠谷幸生（金）、金野昭次（銀）、青地清二（銅）独占した快挙は、同大会のハイライトとして多くの人の記憶に残っています。

オリンピック開催後、幅広い市民に冬の娯楽・スポーツとしてスキーが定着し、冬季アジア大会など、札幌はいくつかのスキーを含む冬季スポーツの国際大会の開催地となってきました。近年では、雪質と市街地からのアクセスの良さなどからスキーを楽しむ外国人観光客も多く、札幌は国際的なスキー・リゾートとしても注目されるようになっています。

藻岩山スキー場（1963 年）
札幌市公文書館

大倉山ジャンプ競技場

サッポロテイネスキー場

④　札幌まつりの華・神輿渡御を支える人々

―概要―

北海道神宮例祭である札幌まつりは、140 年以上も前から札幌に暮らす人々によって引き継がれる、札幌の初夏の風物詩です。祭礼行事や舞台となる場、背景にある札幌の自然、まつりに関わる地域の人々の活動などを一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

構成要素の例：札幌まつり、北海道神宮、中島公園、大通公園、北海道神宮頓宮、宵宮祭・例祭・御輿渡御、祭典区の人々の活動、神輿と山車　など

―ストーリー―

札幌神社（現在の北海道神宮）の例祭が 6 月 15 日に定められたのは、札幌本府の建設が始まって間もない明治 5 年（1872 年）のことですが、明治 10 年代前半の新聞紙面には、例祭の賑わいを伝える記事が既に見られます。そして明治 11 年（1878 年）には、当時の札幌の人々の神幸を願う声の高まりから、市街地への神輿渡御が始まりました。

明治 26 年（1893 年）、当時の札幌区内の有志により、祭礼を仕切る「札幌祭典区」が組織され、その後、各祭典区が競って大型の山車を製作するようになります。祭典区の数は、最盛期には 31 を数えました。

明治末から大正期には、十台以上の山車が祭りを盛り上げ、華麗さを競い合うこともあり、開拓使に画工として出仕し、剣客としても有名な栗田鉄馬が描いた「官幣中社札幌神社神輿市街巡幸之圖」（明治 28 年・北海道神宮所蔵）からは、様々な山車と衣装で市街を練り歩く、当時の渡御の盛大なにぎわいを知ることができます。

今日でも、第一本府、第三山鼻、第四豊水、第六西創成、第七東、第八豊平、第九東北、第十六桑園の 8 祭典区が、明治初期に創建されたものを含めた特色ある山車を地域の象徴として大切に守り伝えており、毎年若葉が芽吹く頃には、各祭典区で山車を磨き、飾りを付けて、札幌最大のまつりのハイライトに備えます。市民や観光客の目を楽しませる一大イベントは、今も昔もこうした人々の活動が盛り立てています。

昭和 35 年の札幌まつり
札幌市公文書館所蔵

札幌まつり　山車と人形
札幌市公文書館所蔵

⑤　積雪寒冷都市の歴史が残す建造物群

―概要―

幕末から明治以降に札幌の都市建設を担った多くの人々にとって、道南や本州の北国とは比較にならない厳しい雪と寒さは経験したことのないものでした。明治の初めに登場する独特の洋風建築群は、開拓使が札幌の風土に合った建築のモデルとして、西洋の優れた防寒建築技術に着目した結果誕生したものでした。このほか、スイス人建築家による歴史的なスキーヒュッテ群など、積雪寒冷な都市だから生まれた特有の建造物等を、一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

構成要素の例:豊平館、旧永山武四郎邸、旧三菱鉱業寮、北星学園創立百周年記念館（旧北星女学校宣教師館）、パラダイスヒュッテ、ヘルヴェチアヒュッテ　など

―ストーリー―

北海道開拓を進めた開拓使は、西洋の優れた防寒建築技術に着目し、札幌建設における官設の建造物全般の洋風化を決定。この動きを主導した黒田清隆は、この時期、北海道民への防寒を旨とした洋風住宅の普及・定着の必要性を指摘してもいます。

方針を受け、明治 5 年（1872 年）以降、まだそれ程広くはなかった市街地には、庁舎、官邸、お雇い外国人の宿舎等、相当数の洋風住宅が次々と出現し、ペンキ塗りの下見板張りやガラス窓を備えた外観は、当時の市民の目を引き、注目を集めたものと想像できます。現存する豊平館や旧永山武四郎邸などからは、米国の寒冷地建築の強い影響を受けながらも、外壁の下見板と室内側の漆喰壁との間に和風建築で用いる本格的な土壁を挿入する、当時の日本人技師の丁寧な仕事があったことなども知ることができます。

その後も、ストーブなど暖房器具の導入や建築材料の変化、流行などが、伝統様式とは異なる札幌の寒冷地建築スタイルを形成してきましたが、大正末から昭和初期には、来札したスイス人建築家マックス・ヒンデルが設計を手掛けた作品群が、寒冷な気候風土にも適応するモデルとして注目されました。大正 15 年（1926 年）に創建され、移転改修を経て現存する登録有形文化財・北星学園創立百周年記念館（旧北星女学校宣教師館）は、隙間風を防ぐ壁面の鉄板張りが特徴的です。

ヒンデルはまた、日本初のスキー・ヒュッテ（西洋式山小屋）とされるパラダイスヒュッテ、これに続くヘルヴェチアヒュッテ、空沼小屋（旧秩父宮ヒュッテ）を手掛けたことでも知られます。これらの歴史的ヒュッテ群は、札幌のスキー文化発展の歴史とともに、長く市民に親しまれる存在として受け継がれています。

北星学園創立百周年記念館
出典：札幌市 HP

パラダイスヒュッテ
札幌市公文書館所蔵

⑥　アイヌ語地名から考える札幌の今昔

―概要―

札幌の地名にはアイヌ語に由来するものが多くあると言われています。先人の研究を参考に、アイヌ語が起源と言われる地名と、その由来になったと考えられる地形などの自然環境等を一定のまとまりとして捉えた関連文化財群です。

構成要素:アイヌ語地名、琴似、サクシュコトニ川、偕楽園緑地、北大植物園、知事公館、ヌプサムメム、ピシクシメム、キムクシメム、山田秀三、札幌のアイヌ語地名を尋ねて　など

―ストーリー―

アイヌ語地名について考える手掛かりとして、ここでは、アイヌ語地名研究で知られる山田秀三の著書「札幌のアイヌ語地名を尋ねて」を取り上げます。

本書によれば、現在の大通から北海道大学周辺は、かつて、多くの湧水を集めた川筋（旧琴似川水系）が流れ、アイヌ民族は、泉池が低い凹地を形成する地形の特徴から、一帯を「コッ・ネ・イ（kot-ne-i)」(「凹地・になっている・ところ」の意）と呼んでいたと考えられます。明治政府がこの名を旧琴似村の村名に用いた結果、元々そう呼ばれた場所から離れた別の場所に、「琴似」の地名が定着しました。

山田はまた、かつて「コッ・ネ・イ（kot-ne-i)」一帯に点在した泉池でアイヌ語名が記録に残る「ピシクシメム（pish-kush-mem」と「キムクシメム（kim-kush-mem)」について、「浜側（豊平川の岸の方)・を通る・泉池」・「山側・を通る・泉池」と訳される一対の呼称とし、前者は今の北大植物園、後者は今の知事公館に存在した兄弟のように似た泉池（流れ）だったのではないかとの考察も行っています。

身近なアイヌ語地名を知り、時にはその土地を歩いてみることで、私たちは、アイヌ民族が生活する土地をどのように捉えていたかという、アイヌ文化の一端に触れることができます。また、アイヌ語に漢字が当てられ、時にアイヌ語の意味と切り離されて地名が「移って」しまうこともあった、札幌を含む北海道の歴史文化…地名の成り立ちの特徴について知ることができます。

サクシュコトニ川

知事公館内に見られる窪地

都心北部図

出典:札幌のアイヌ語地名を尋ねて　山田秀三著

4 関係施設一覧

No	名称	所在	施設の概要
1	札幌市公文書館	中央区南 8 条西 2 丁目 5-2	平成 25 年（2013 年）7 月に開館。特定重要公文書の整理・保存、閲覧。
2	札幌市 埋蔵文化財センター	中央区南 22 条西 13 丁目 1-1	平成 3 年（1991 年）3 月に開館。埋蔵文化財の保存に関する相談や遺跡の発掘調査、出土した遺物・記録などの整理・研究、収蔵・展示。
3	新琴似屯田兵 中隊本部	北区新琴似 8 条 3 丁目 1-8	屯田兵中隊の本部として建てられたもの。当時の屯田兵村のジオラマや、中隊長の服など、屯田兵にまつわる資料の展示。
4	屯田郷土資料館	北区屯田 5 条 6 丁目 （屯田地区センター内）	屯田兵による開拓 100 年の歴史を記念して、昭和 63 年（1988 年）10 月に開設。実物大の屯田兵の家屋を再現。
5	篠路烈々布 郷土資料館	北区百合が原 11 丁目	開拓 100 年目の昭和 57 年（1982 年）に開館。文献や古文書他、伝統芸能の資料の展示。
6	札幌村郷土記念館	東区北 13 条東 16 丁目 2-6	大友亀太郎の役宅跡地。亀太郎関連文書、玉ねぎ関係の資料等の展示。
7	丘珠縄文遺跡	東区丘珠町 584 他 （サッポロさとらんど内）	丘珠縄文遺跡を活用した縄文体験や展示。
8	白石郷土館	白石区南郷通 1 丁目南 8-1（白石区複合庁舎 1 階）	平成 28 年（2016 年）11 月に開館。旧仙台藩白石城主片倉小十郎の家臣が移住した明治 4 年（1871 年）から、白石村が札幌市と合併した昭和 25 年（1950 年）までの記録を、パネルなどで展示。
9	つきさっぷ 郷土資料館	豊平区月寒東 2 条 2 丁目 3-9	旧陸軍北部軍司令官官邸として昭和 16 年（1941 年）に建てられた建物に、昭和 60 年（1985 年）に開館。旧陸軍資料の展示。
10	平岸郷土史料館	豊平区平岸 3 条 9 丁目	平岸地区の開拓 110 年目にあたる昭和 57 年（1982 年）に開館。土器や石器、農機具などの展示。
11	札幌市 博物館活動センター	豊平区平岸 5 条 15 丁目 1-6	札幌の特徴ある自然環境とその成り立ちについて解説するパネルや標本、資料などの展示。
12	福住開拓記念館	豊平区福住 1 条 4 丁目 （福住まちづくりセンター併設）	昭和 46 年（1971 年）に開館、平成 9 年（1997 年）に福住まちづくりセンターに併設。開拓当時の生活の様子を描いた版画の他、昔の馬車、農機具などの展示。
13	あしりべつ郷土館	清田区清田 1 条 2 丁目 （清田区民センター内）	昭和 58 年（1983 年）に開館。平成 14 年（2002 年）1 月に清田区民センターに併設。考古資料や歴史資料、農機具などの展示。
14	サッポロピリカコタン（アイヌ文化交流センター）	南区小金湯 27 番地	アイヌ民族の伝統衣服や民具などの展示。
15	定山渓郷土博物館	南区定山渓温泉東 4 丁目 308 （定山渓小学校敷地内）	定山渓の歴史資料の展示、定山渓の歴史の音声解説付き「クロニクル展示」など。
16	交通資料館	南区真駒内東町 1 丁目	市営交通の歴史写真、車両や部品、制服、乗車券などの展示。（休館中）
17	簾舞郷土資料館	南区簾舞 1 条 2 丁目 4-15 旧黒岩家住宅（旧簾舞通行屋内）	昭和 61 年（1986 年）に旧簾舞通行屋内に開館。当時の開拓農家の様子の展示など。
18	琴似屯田歴史館 資料室	西区琴似 2 条 7 丁目	屯田兵に関する資料や屯田兵が実際に使っていた道具の展示。
19	手稲記念館	西区西町南 21 丁目 3-10	手稲町と札幌市の合併を記念して昭和 44 年（1969 年）に開館。手稲の郷土の歴史解説コーナー、歴史資料の展示。